

一神教の対話 研究者ら論議

同大が国際シンポ



2001年の米同時多発テロ以降、欧米とイスラム諸国は対立を繰り返し、中東のパレスチナ問題も混迷が続く。その背景の一つにユダヤ教やキリスト教、イスラム教といった一神教の歴史がある。京都市左京区の国立京都国際会館でこのほど開かれたシンポジウム「宗教の出会いがもたらす争いと豊かさ」では、国内外の一神教研究者が対話の促進や多文化共生への糸口を探った。

同志社大一神教学際研究センターが企画し、米、英、イスラエル、マレーシアの研究者4人が講演した。

世界に神は一つと考えるユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、歴史をさかのぼれば兄弟ともいえる近い関係ゆえに「ライバル意識」も強い。聖地エルサレムにあるヘブライ大のポール・メンデス

多文化共生の重要性を語るパネリストたち（京都市左京区・国立京都国際会館）

フロール名誉教授（ユダヤ思想）は「一神教において他の信仰を許すよう指導できるかは大きな課題」としたうえで、「すべての人が神の創造物という視点に立てば、対話は互いのコミュニティーを揺るがすものではなく、信仰の下にある人間性を許し合うことにつながる」と述べ、道徳的な寛容の姿勢が神学的にも美德となる可能性を説いた。

また、対話の促進に取り組む米ハートフォード神学校のヤフヤー・ミシヨット教授は、イスラム教においても「対話はコーラン上の命令でもある」と解説。中東の民主化運動「アラブの春」をイスラム教徒の対話姿勢の表れと位置づけ、「最も高貴な聖戦は独裁者に正義を訴えること」とする預言者の言葉がある。公正真実のために民主化に立ち上がり、非暴力によりそれを実現した」と述べた。

パネル討論では「互いの嫌悪や怒りの理由を理解する努力を」「気候変動などの地球課題に対しては、神との関係を超えて対応していくべき」といった意見も出た。信仰の多様な外国人が暮らす日本でも、こうした視点が求められそうだ。

（佐久間卓也）